

モモ「さきがけはくとう」の大玉生産のための栽培方法



	50cm間隔着果	40cm間隔着果 (対照)
葉果比(葉/果)	128	108
果実重(g)	231	224
糖度(度)	12.0	11.9

「さきがけはくとう」の成熟果

着果間隔の違いが成熟時の葉果比、果実重、糖度に及ぼす影響

開発のねらい

岡山県が育成したモモの早生品種「さきがけはくとう」は、これまでの早生品種と比べてやや小玉であるため、市場ニーズに合う230~250g程度の大玉を生産する栽培方法を明らかにしました。

新技術の概要

- この品種の樹のすそ部分（主幹から半径1.5m以内、高さ1m以下）には、小玉や食味が不良な果実が混在するため、仕上げ摘果時に全て摘果すると、全体的に果実がやや大きく、糖度がやや高くなります。
- 結実がわかり次第、予備摘果を最終着果量の約2倍（25cm間隔着果）とします。
- 仕上げ摘果時に、結果枝50cm間隔（通常は40cm間隔）で着果させると、葉果比が大きくなり、大玉の比率が高まります。
- 樹勢が強い樹は果実が大きくなる傾向があるため、樹勢を強めに維持します。
- この品種は、300gを超える果実は日持ち性が劣ることがあるため、極端な大玉生産は控えてください。

活用場面

市場ニーズに合う大玉の「さきがけはくとう」の安定生産技術は、「岡山白桃」のブランド力向上や農家経営の安定につながります。